

平成 30 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02701

研究課題名(和文) 日本語母語話者の韓国語学習における誤用分析および誤用改善のための指導案作り

研究課題名(英文) Using error analysis to design lesson plans for Japanese learners of Korean

研究代表者

印 省熙 (IN, SUNGHI)

早稲田大学・文学学院・准教授(任期付)

研究者番号：10445702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本の大学で韓国語を学ぶ中級学習者が犯しやすい韓国語の誤用を調査、分析し、その改善と防止のための指導案を作ることを目的としている。資料は、大学の韓国語専攻者と非専攻者が作成した作文を使用した。研究ではまず、韓国語専攻者と非専攻者それぞれについて誤用の特徴を把握し、その原因を探った。次に、両者を統合し、特に指導が必要な項目についてテキストや参考書などの関連する記述を参考に適切な指導方法を考察し、提示した。本研究の成果は学会発表と論文において発表した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to analyze common errors produced by intermediate learners of Korean at a Japanese university and to develop lesson plans based on the results. Using essays written by Korean major and non-major students, we identified several types of error and analyzed the reasons that cause them to be made. We then developed lesson plans that provided guidance in relation to specific errors. These lesson plans were designed with reference to current textbooks and teachers' guides. The results of this research were presented at conferences and published on academic journals.

研究分野：韓国語教育

キーワード：韓国語学習者 日本語母語話者 中級学習者 専攻 非専攻 誤用 指導案

1. 研究開始当初の背景

近年、日本の韓国語学習者が増加しているなか、日本語母語話者を対象とした韓国語の誤用分析の研究は十分とは言えない。

国広哲弥(『構造的意味論-日英両語対照研究-』三省堂、1967)で、「外国語学習ではその外国語と母国語の対照研究によって食い違う点を十分に認識することが学習能率を上げるために必要」(p.145)と指摘しているように外国語教育において学習者の母語の影響により生じる誤用の分析が欠かせず、指導の際に、両言語の相違についての説明を行うことは学習効果を上げるために大変有益であると考えられる。

本研究代表者と分担者のうち2人は現代語文法における日韓対照研究を専門研究領域としており、日本語母語話者を対象に韓国語教育を行っている。もう1人の分担者は、日本語母語話者の立場から長年韓国語教育に携わっている。4人とも韓国語教育の現場において繰り返し起こる誤用を防止するための教育的工夫が十分になされていないことを痛感し、誤用防止対策の必要性を感じてきた。

研究代表者は、作文資料を用いて学習者の誤用例のパターンを可視化するための研究を試み、誤用に関するパイロット研究を重ねて来たが、1人だけの研究には限界があった。そのため本研究をより発展させ、多くの誤用例を用いた網羅的で体系的な研究を行うため、同じ目的意識を持った4人が協力しあい、誤用の改善と防止のための指導案作りという本研究に取り組むことに至った。

日本語を母語とする韓国語学習者が間違えやすい表現や文法、語彙を重点的な学習項目として指導内容に組み込むことは、韓国語の運用能力の向上を図る上できわめて重要である。本研究の成果は、日本における韓国語教育のみならず、韓国における日本人向けの韓国語教育においても有益な資料となると確信し、本研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

本研究は従来ほとんど体系的な研究がなされてこなかった日本語母語話者の韓国語学習における誤用について、その出現様相を明らかにし、誤用の内容を分析した上で、既存のテキストや参考書などの関連する記述を調べ、誤用の改善や防止のための内容を盛り込んだ指導案を作ることを目的とするものである。

3. 研究の方法

(1) 研究の資料

本研究の資料は、関東地域の2つの大学における韓国語学習者計79名の作文に見出さ

れた誤用例である。作文は「自己紹介」、「私と韓国語」、「生活の中のエピソード」、「韓国と日本の違い」などのテーマに沿って、2009年から2016年にかけて書かれたもので、文の総数は3,892文、約36,000語節である。ここから4,700余りの韓国語誤用例が採集され、これを本研究の資料としている。

なお学習者の中には韓国語を専攻とする者と、そうでない非専攻学習者が含まれるが、両者とも韓国語授業における到達目標は、ハングル能力検定試験3級であり、本研究ではこれらの学習者を「中級学習者」とみなす。

(2) 研究の方法

誤用例の判別と確認に際しては客観性を付与するため、本研究に直接に携わる研究代表者と分担者のほかに、韓国語を母語とする韓国語教師2名を協力者として加え、韓国語母語話者5名と日本語母語話者1名の計6名の韓国語教師が作業を行った。

その後、誤用例について、先行研究に沿って、「文法論的誤用」、「意味論的誤用」、「表現・談話論的誤用」、「表記上の誤用」、「その他」の項目に分類し、それぞれの項目について、誤用の出現頻度や様相などの特徴を分析した。

これらの分析内容を専攻者と非専攻者別に誤用例の数値的な情報とともに学会で発表したのち、その内容を補完修正し、論文として発表した。

そして全体の誤用例から、中級学習者において頻繁に発生する出現頻度の高い誤用項目を抽出し、それぞれの項目について誤用を防ぐための指導案の作成を行った。

指導案では誤用の特徴と原因を記述するとともに、既存のテキストや参考書、辞書などの調査・分析に基づき、当該項目を指導するさいの方法や注意点を提示した。

4. 研究成果

(1) 誤用分析

初年度と次年度は、学習者の作文に見られる韓国語誤用の様相を、専攻者の場合と非専攻者の場合についてそれぞれ分析・研究を行い、学会発表を経て、論文を執筆した。(雑誌論文、学会発表参照)

以下、その内容を詳しく述べることにする。

研究初年度は、専攻学習者についての研究を行った。具体的には、韓国語専攻の2年次生24名の作文(総29,943語節)を研究資料とし、そこから採集された約3,500の誤用例について分類を行い、誤用の様相や特徴について分析を行った。

その結果、「文法論的誤用」では、助詞の漏れが最も多かったが、特に助詞「(を)」の使い方における誤用が著しく、接続形では日

本語の「して」と訳される韓国語の多様な形式における誤用、過去と現在のテンスにおける誤用、未来連体形と現在連体形における誤用、形容詞と動詞の品詞の取り違えによる誤用が顕著に現れた。

「意味論的誤用」では、日本語の漢字語を直訳したことによる誤用や、連語や類義語における誤用が多く、「表現・談話論的誤用」では主語や目的語、副詞などの漏れが多く、それらを省略する日本語の影響が見られた。「表記上の誤用」では日本語で「ウ」「オ」「エ」と現れる母音の二つの形式における誤用が多かった。

研究2年度は、非専攻学習者の誤用の様相を把握するため、選択外国語の中級と中上級のクラスにおける延べ55名(異なり44名)の作文(総6,432語節)を研究資料とし、そこから採集された約1,200の誤用例について分類を行い、誤用の様相や特徴について分析を行った。

その結果、専攻学習者の作文において見られた誤用の特徴がおおむね非専攻学習者の作文からも観察でき、それらの誤用は中級学習者に共通して見られる特徴として結論づけることができた。

(2) 指導案

研究最終年度は、専攻者と非専攻者の両方の作文における誤用例を統合して、誤用が多く見られる項目を抽出し、それらの誤用の改善や防止のための指導案の作成を行った。2度の学会発表を通して指導案の内容を公表し、語彙の誤用に関しては、実際の授業現場における指導法を論文として発表した。(雑誌論文、学会発表 参照)

以下、その内容を詳しく述べることにする。

指導案の項目

指導案で扱った誤用項目は、文法では助詞、接続形、連体形、テンス・アスペクトに関わるもののほか、語順における副詞の位置や、「～なる」の韓国語の多様な形式、複数や尊敬を表す形式の漏れなど、日本語と韓国語が1:1ではなく、1:多に対応する場合や日本語との使い方の違いにより誤用が多く発生するものを扱った。

語彙では、文法よりも多様なパターンが現れており、「(易しい)」と「(簡単だ)」のような類義語や類似した表現の使い分けにおける誤用、「(対話する)」ではなく、「(会話する)」を用いるなど日本語の表現をそのまま韓国語の語彙にあてはめたことによる誤用が多く見られたが、指導案では、学習者に広く見られる誤用、指導に注意を要する誤用項目、日韓の語彙の使い方における違いが誤用の原因であるものなど、日本語母語話者が間違えやすい項目を重点的

に扱った。

指導案の記述

指導案の記述においては、誤用の特徴と原因を分析するとともに、テキストや参考書・辞書などの記述を調査・分析し、当該の各項目について、指導するさいの注意点をはじめ、誤用の防止や改善のための指導法を提示することとした。

例えば、文法の場合、助詞「(を)」を用いるべきところへ助詞「가(が)」を用いてしまう誤用については、日本語とは違い、助詞「(を)」を取る場合の用言をリストアップして示した。日本語の影響が強い誤用であるだけに、学習者には特に注意を促す必要があるためである。

そのほか、未来連体形を用いるべきところへ、現在連体形を用いた誤用の場合は、日本語ではどちらも「～する」となるため現在連体形との使い分けが難しいことを指摘し、現在連体形は、現在行われている(存在する)事柄、習慣、一般的な事実を表す場合に用い、未来連体形は、後続の名詞として「(予定)」、가 (可能性)、(機会)、(準備)」などを伴い、まだ実現していない事柄を表す時や、「(時)」を修飾する場合、そして「～すべき(事柄)」の意味で「(こと)」、(必要)、(時間)、(資格)」などが後続する場合に用いることが多いことを述べ、典型的な例文を示した。

語彙の場合においては、例えば「こと」と訳される「 」と「 」の場合は、「 」を用いるべきところに「 」が用いられる誤用が多いが、これは、学習者が「 」を「仕事」の意味で理解し、「こと、事実、成り行き、現象、事件」といった意味で用いることができなことが一つの原因となっていることを指摘し、学習者には、「(よいこと)」、「(大変なこと)」のような形容詞の連体形に続く形で「 」を提示して「仕事」以外の用法を身に付けさせる必要があることや、「(よいこと)」と「(よい物)」の意味の比較を通じて基本的な違いを理解させることが定着に役立つと指摘した。

なお、「よく」と訳される「 」と「 」の場合については、「 」は「しょっちゅう、たびたび、しばしば」の意味であり、「 」ならば「たびたび眠る」であるが、「 」ならば「十分に、ぐっすり眠る」の意味となることを指摘し、「 」と「 」の意味の比較を通じて2つの意味の違いを理解させるという方法を提案した。

そのほか、「送る」と訳される「 」と「 」の違いについては、「 」は目的語を伴い、「 」は主に副詞を伴うことなど、文型としての習得の必要性を指摘した。また、日本語では「行く」と表現されるものが韓国語では「(通う)」と表現される

場合については、通勤・通学など、継続的、習慣的な行き来を表現する場合は「(通う)」を用いるよう指導することを提案するなど、それぞれの語彙の使用場面や結合しやすいパターンなどの条件を示した。

以上のように、指導案ではそれぞれの項目について、誤用例の提示、既存のテキストや参考書における関連する内容を調査・分析して示し、誤用の原因および指導上の注意点や指導の方法を簡潔に示すように努めた。

このような指導案は、韓国語教師は指導のさいの手引書として、韓国語学習者は参考書として用いることができると考えられる。

(3) その他の成果

その他、個別の研究として、語彙の指導案(雑誌論文 参照)誤用例からみた日韓対照研究(雑誌論文 参照)上級クラス作文の誤用分析(雑誌論文 参照)中・上級クラスの学習項目考察(雑誌論文 参照)を発表した。

(4) 今後の計画

現在、本研究の成果をまとめ、日本語母語話者が犯しやすい誤用を防ぐための指導の手引きの冊子作成に着手し、その内容の確認と修正の作業を行っている。

一方で、学習者から集められた誤用例について、日本語母語話者が韓国語を学習するさいに注意すべき誤用のデータとなるよう、誤用例リストの統一記述のための作業を行っている。

指導の手引き書と誤用例リストは、日本語母語話者向けの韓国語教育の現場に役立つことはもちろんのこと、日韓対照研究にも貴重な資料になると確信する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

山田佳子・印省熙・宋美玲・白寅英, 韓国語中級学習者における語彙の誤用 - 教室における指導法について -, 『国際地域研究論集』9, 国際地域研究学会, 査読無, 2018.03,109-122

白寅英・山田佳子・宋美玲・印省熙, 韓国語中級学習者の作文における誤用分析 - 非専攻者の場合 -, 『マテシス・ウニウエルサリス』18-2, 獨協大学国際教養学部, 査読無, 2017.03,73-97

山田佳子,(研究ノート)「入る」、「出る」を表す韓国語の用法について - テキスト調査に基づく指導案の提示 -, 『国際地域研究論集』8, 国際地域研究学会, 査読無, 2017.03,115-122

印省熙, 日本語と韓国語 - 日本語母語話者韓国語学習者の誤用例を通して -, 『鈴木

泰先生古希記念論文集』,国際連語論学会, 査読無,2017.03,201-210

印省熙・山田佳子・宋美玲・白寅英, 韓国語専攻2年次生の作文における誤用分析, 『韓国語教育研究』6, 日本韓国語教育学会, 査読有,2016.09,86-110

印省熙, 韓国語上級クラスの二つの作文資料による誤用分析の試み, 『朝鮮語教育-理論と実践-』11, 朝鮮語教育学会, 査読有, 2016.03, 4-24

山田佳子,(研究ノート)韓国語中・上級クラスにおける学習項目考察-新潟県立大学における2015年度の事例-, 『国際地域研究論集』7, 国際地域研究学会, 査読無, 2016.03, 77-81

〔学会発表〕(計4件)

印省熙・宋美玲・白寅英・山田佳子,韓国語学習における誤用とその指導について, 『第8回日本韓国語教育学会学術大会』日本韓国語教育学会,2017年11月4日,名古屋:愛知学院大学

宋美玲・印省熙・山田佳子・白寅英, 日本語母語話者の韓国語学習における誤用改善のための指導案作りの試み, 第12回韓国言語・文学・文化国際学術大会, 2017年1月9日,京都:同志社大学(発表:韓国語)

白寅英・山田佳子・宋美玲・印省熙, 韓国語中級学習者の作文における誤用分析 - 非専攻者の場合 -, 第70回朝鮮語教育学会例会, 2016年6月19日,京都:京都女子大学

印省熙・山田佳子・宋美玲・白寅英, 韓国語専攻2年次生の作文における誤用分析, 第6回日本韓国語教育学会学術大会, 2015年10月31日, 北海道:札幌市教育文化会館

6. 研究組織

(1)研究代表者

印 省熙 (IN SUNGHI)

早稲田大学・文学学術院・准教授(任期付き)
研究者番号: 10445702

(2)研究分担者

山田 佳子 (YAMADA YOSHIKO)

新潟県立大学・国際地域学部・教授
研究者番号: 10425366

宋 美玲 (SONG MEERYUNG)

東京外国語大学・外国語学部・研究員
研究者番号: 50572822

白 寅英 (BACK INYOUNG)

獨協大学・国際教養学部・非常勤講師
研究者番号: 80749945

(3)研究協力者

李 和貞 (LEE HWAJEONG)

早稲田大学・非常勤講師

張 美仙 (JANG MISUN)
九州産業大学・非常勤講師

郭 珍京 (KWAG JINGYEONG)
立教大学・兼任講師